



季節を知ったら 暮らしが楽しくなった

〈第五十三号〉

雨水 うすい
二月十八日



答志の神祭

毎年繰り返して行われる祭は、記録した古文書こもんじよもなく、由来がわからないところがほとんど。鳥羽の佐田浜港から定期船で約三十分、鳥羽市答志島の答志に神祭じんさいと呼ばれる八幡祭を訪ねると、やはり詳しいことはわかりませんでした。けれど現代では珍しいほどの祭の熱気がありました。

八幡祭は、大漁を祈願して、今年は二月十日から三日間、地域全体で盛り上がりします。この三日間は島の基幹産業である漁も休み。漁船は正月前に取り付けた笹竹を八幡祭まで残し、祭日には再び大漁旗で飾ります。旅館も休みで、島外の者には夜に披露される演芸を見る機会おおもはほとんどありません。

祭のクライマックスは、畳一枚半ほどの大的おおまとの奪い合い。的に分厚く丸八と書かれた墨をとって自宅に丸八を書くおまと魔除けになるといわれるからです。家々の丸八マークは毎年新しく記されていました。マークはもともとは玄関の両戸に書かれていましたが、サッシが普及して両戸がなくなり、今は玄関の横あたりに見かけます。

答志ではこの祭が済むと、漁が本格的になってきます。そのために漁業の守り神、八幡神社の祭はおろそかにできないと、漁協の方はきっぱりと言います。この八幡神社も祭も漁協が管理しているほどです。

鳥羽湾に浮かぶ島は、格好の漁場に恵まれ、古くから漁業を生業としてきました。そして今も離島でありながら、若者も多く、魚市場では一日に何度もセリの声が響いています。この祭が続く限り、八幡さまも大漁を約束してくれることでしょう。漁村になくはならない祭だからこそその熱気だと確信しました。

文 千種清美